



モデル
高橋マリ子さん

透明感のある容姿と圧倒的な存在感で一躍注目を集め、これまでに数多くのファッション雑誌、CFなどで活躍を続けるモデル、高橋マリ子さん。もともと写真を撮るのが好きだったという彼女が、大学入学を機に手にしたのがマニュアル一眼レフカメラ。新たなツールを手に学校の友達の写真を取り、大学の暗室を使って現像やプリントを楽しんでいるという。カメラとともに大学生活を満喫しているマリ子さんに、その面白さ、魅力をたっぷりとお聞きした。

プロフィール

1984年、サンフランシスコ生まれ。映画監督をしているアメリカ人の父とエッセイストの母を持つ。8歳のときにモデルデビューし、14歳から雑誌「nicola」（新潮社）などで本格的にモデル活動を始める。ファッション雑誌、CFなどで活躍を続け、若者にカリスマ的な人気を誇る。現在都内の大学に通う21歳。
これまでの主な活動として、雑誌「Olive」（マガジンハウス）「スプリング」（宝島）「VOCE」（講談社）「Spoon.」（角川書店）など多数。CFに「キュービーハーフ」（キュービー）「J-Phone」（現vodafone）「キスミント」（グリコ）など。現在「HAKU」（資生堂）が放送中。写真集に「太陽とハチ蜜」（藤代真砂撮影/リトルモア）「マリ子グラフ」（恩田義則撮影/角川書店）「カクタスフラワー」（リンダ・ケイ撮影/wepJapan）などがある。
2001年に映画「世界の終わりと同名の雑貨店」（濱田樹石監督）で女優デビュー。その後「凶気の桜」（蘭田賢次監督）、「アバンギャルド〜恋のキャラメル〜」（斉藤玲子監督）に出演した。8月14日には、WOWWOWで放送される山田洋次原作・脚本の戦後60年記念ドラマ「祖国」に出演。台詞が全て英語という役柄に挑戦している。

大学入学をきっかけに手にした一眼レフカメラ 写真部入部の動機は“暗室が使えるから”

写真を撮り始めたのはいつ頃からですか？

一眼レフカメラで撮り始めたのは2年ほど前からです。大学に写真部があって、そこに入ったのがきっかけでカメラを買って撮るようになりました。でも、その前からコンパクトカメラを持ち歩いて写真を撮っていたので、それを入れると結構前から撮っていますね。

写真を撮りたいと思うようになったきっかけは何ですか？

小さい頃から雑誌の撮影の現場などでフォトグラファーさんの仕事を見たり触れる機会があったので、いつのまにかカメラに興味を持つようになったんです。撮る側ってどんな感じだろうって。

写真部に入ったのは、本格的にやってみようという興味からですか？

ずっと前から自分で写真を撮ってみたいって思っていました。写真部に入ると学校の暗室が自由に使えるから（笑）。やっぱり自分で焼けるようになると、これまでの写真に対する興味の種類が変わってきますよね。

カメラは何を使っていらっしゃるのですか？

FM2です。周りに聞いたら初心者はこのカメラがいって勧められました。

仕事と一緒にフォトグラファーさんに聞いたり？

そうですね。藤代真砂さんは結構相談のつてくれましたよ。すごいですよね、プロで活躍されている方が周りにいてカメラについて聞けるなんて。

実際に使ってみて、マニュアルだからというところとまではありませんでした。フィルムの入れ方や巻き方は最初慣れませんでした。絞やシャッタースピードは内蔵の露出計を見ながら撮れるので、すんなりと覚えることができました。それよりも暗室の作業が難しいです。写真を撮るのはそれに比べて本当に楽で、現像して焼いてというのはすごく大変だなと思いました。



撮るよりも焼くことが楽しい！「今、暗室作業にハマっています」

今その暗室作業にハマっていらっしゃるそうですね。

はい。結構暗室に通っていますね。今朝も1人で焼いてきました。写真を撮るのも面白いんですが、写真を撮るのが今一番面白いです。

どんなところが面白いのですか？

やっぱり画像が浮かび上がってくる（フィルムを印画紙に焼き付けて現像液にひたすと、印画紙に画像が現れてくる）瞬間が1番好きです。あとは、たとえば光を当てる（露光する）秒数がちょっとでも違うと写真全体の印象が変わってしまうところとか、光りを当てるときにフィルターをかけて焼くこともできて、それによってコントラストをはっきりさせたりだとか、いろいろなことができるんですよ。そういうのが全部面白い。

面白いけれど、大変でもある？

そうですね。フィルム現像液は水と1対1で、焼いた後の現像液は1対何で薄めるとか、そういう基本的なことも含めてとにかく覚えることがたくさんあるので大変です。

大変と言えば、学校の暗室には現像液や定着液の温度調節をする機械がないので冷えた缶ジュースで調節するんです。買って来たジュースを液の入っているバットに入れて冷やすので、後でぬるくなったジュースを飲まないといけなくて、それも結構大変（笑）。

写真を撮るときに気をつけていることはありますか？



写真は四つ切りサイズで焼く。
「もったいない気もするけれど、大きいサイズで焼いた方が面白いんです」

顔に半分くらい、ふわっと光がさしているような写真が好きなんです。そういう写真の場合は光と影のコントラストがパキッと出してしまうとつまらない感じになってしまうので、やわらかい色みが出るように気をつけたりはします。今はほとんどモノクロでしか撮影していないんですが、暗室にはカラーを焼く機械もあるのでいつかはカラーも焼いてみたいんです。モノクロよりも難しいみたいで、使っている人がいほとんどいないから、まだやったことはないんです。

モノクロのように思い通りの色を出すことが難しいかもしれませんが、でも、そこがまた面白いのではないのでしょうか。

暗室にいろいろな人の写真がいっぱい転がっていて、カラーで焼いた写真を見てみると、すごく淡い色みなんですよね。あつたかくて淡い写真。パキッとしていなくて、デジタルカメラで撮ったものとは正反対という感じの写真なんです。デジタルカメラで撮った写真よりもそういう写真が好きなので、ぜひやってみようかな。

カラーもやり始めたら、これからますます暗室に通い続けてしまいそうです。

たしかに、授業に出なくなりそう！だって、暗室にこもっていると時間の流れが本当に早いですよ。あつと言う間に時間がたってしまうから、授業なんて出る暇ないわって思っちゃう（笑）。

人物写真を撮るのが好き 面白いのは撮る側と撮られる側の呼吸が合う瞬間

普段はどんなものを撮っているのですか？

ずっと前から人物が好きなので、人物写真ばかり撮っています。一眼レフカメラを持つようになってからは、前に比べて風景写真も撮るようになりましたが、今は大学の友達を撮ることが多いです。授業の合間に「ちょっと撮らせて」ってお願いして撮ります。教室で撮ることもあるし、外に呼び出して撮ったりもします。

なぜ人物写真？

人のいろいろな表情を撮るのが好きなんです。その瞬間しかない表情を残すことができるし、撮る側と撮られる側の呼吸が合うとすごくいい写真が撮れたりして、それが面白いんです。

呼吸が合う？

撮っていると呼吸が合う瞬間がわかるんです。ファインダーの中から見ていて「あ、今のよかった」って思ったカットは、現像してみるとやっぱりそれが1番よかったです。撮られていてもそれは感じますよ。フォトグラファーさんと距離感がつかめないとか、初めての人だとまじかかないとか、この人とは合う合わないというのはありますから。

仲の良い友達だったら、呼吸も合わせやすそうです。

うーん、でもなかなかそうやって撮られることってないと思うので、最初の方はやっぱりみんな照れてますよ。でもだんだん打ち解けていい表情を出してくれそうです。カップルの写真を撮るのも好きなんですけど、「そこ、もっとくっついて」（笑）って言って撮っていると、表情も柔らかくなってきます。

撮った写真は友達にあげたりしますか？

何枚か焼いて、1番かわいく写っている写真を選んであげています（笑）。最初は照れていらないうって言われるんですが、写真を部屋に飾ってくれているみたいです。多分、モノクロで大きく引き伸ばされた自分の写真って、普段自分で撮っている中では手にする機会がないと思うんです。だから、そういう写真をあげると本当に新鮮に感じるみたいですごく喜んでくれて、うれしいですね。

撮影するときのこだわりや気をつけていることはありますか？

こだわりかどうかはわかりませんが、人の表情を撮りたいので比較的上の写真的な写真が多いです。特に笑った顔の写真を撮るのが好きなんです。あとほうつむき加減の写真も多いですね。でも、今1番撮ってみたいのは泣いている写真なんです。目薬は嘘っぽくなるからダメですよ。だからなんとか泣いてもらうしかないんだけど（笑）、そんな機会はなかなかないですから、撮れないんです。

スポーツなどの感動の場面に立ち会えば撮れるかもしれないですね。それとも失恋して大泣きしているような涙を撮ってみたい？

あ、そうそう、そっち！悲しくて辛い涙が撮りたい（笑）。この間「クローサー」という映画を見たんです。ジュリア・ロバーツがフォトグラファーの役で、共演のナタリー・ポートマンの泣き顔を撮るんです。映画の中でジュリア・ロバーツは展覧会を開いて、その写真を大きく伸ばしてパネルに貼って展示するんですが、その写真がすごくよくて、あ、これいいなって思って。いつか泣き顔を撮ってみたいですね。



うれしさでも、悲しさでも、感情が顔に強く現れている写真が撮りたいそうだな

写真撮影はひとつずつ作り上げていくもの その現場の雰囲気を楽しむ

モデルを始めたきっかけは何ですか？

1番最初は8歳のとき、母親の友達のデザイナーさんの服を着たのがきっかけです。それで、14歳頃から本格的に活動を始めました。

最初の撮影時のことを覚えていますか？

覚えてますよ。緊張したけど、でも洋服を着せてもらったりして悪くないなあって（笑）。出来た写真を見たときは不思議な感じでした。それは今もそうなんです。テレビのCFに出ていたり本屋さんで雑誌を見たりするとちょっと変な気持ちになります。どこか他人を見ているような、自分はここにいるのに何でそこに？みたいな感じ。特に悲しいことがあったときにテレビや写真の中でニコって笑っているのを見ると、ちょっと微妙な心境になります（笑）。

14歳で本格的にモデル活動を始めたというのはご自分の意志ですか？

そうです。この仕事が好きだったので。でも、写真に撮られてうれしいということではなく、撮影現場の雰囲気が好きだったんです。それに、小さい頃は大人に囲まれたりすることって新鮮だから、それが楽しかったんです。それは今も同じで、雑誌に出られるとかではなくて、現場が楽しいから続けています。メイクを始めて服を着て、ひとつずつ段階を踏んで1枚の写真が出来上がっていくという感じがするんです。それに、最近はスタッフと自分の年齢が近づいてきて、やっと大人として、仕事仲間として受け入れられて来たような感じがするのうれしいんです。今まではまるっきり子供扱いでしたから。

写真撮影は、モデルさんもスタッフと一緒に作り上げていくという感覚なんですか？

そうですね。でも最近は、どのファッション雑誌も似てきてしまっていて、わりとカタログっぽいものが多くなりましたよね。メイクもナチュラルが流行りです。以前はかなり凝った撮影が多くて、メイクもすごく作り込んでいたのを見ていただけで楽しかった。セットも1回ごとに違ったり、写真の撮り方も凝っていたり、やっぱりそういう作り込んだ撮影は面白いですね。

演技は今1番興味のあること いろいろな役にチャレンジしていきたい

最近は演技にもチャレンジされていますね。

これまで写真の仕事が多かったので、演技をするというのは本当に新鮮です。今まではその場に行って撮影してそこで完結していたのに、台詞を覚えたり役作りをしたり、現場だけではなく宿題みたいに自分の家でやってくるのが増えた。そういう、現場に入るまでの下準備をする時間を作るというのが新しい経験だなと思いました。

演技で戸惑ったりすることはありませんでしたか？

泣くシーンがあったんですが、なかなか涙が出てこないんですよ。悲しいことを思い出したりしてもダメで、私は演技には向いていないのかなあって思いました。そのときは辛くて、ちょっと諦めたいなって思ったくらい（笑）。

周りに大勢の撮影スタッフがいる中で泣くなんて、緊張するでしょうしなかなか大変そうですね。

うーん、私、涙腺が硬いのかも知れない。普段もよほど悲しい映画を観たときにしか泣けないんですよ。泣いても悔し涙！みたいな感じで（笑）。大勢のスタッフさんに囲まれることには慣れているんですけどね。

雑誌の撮影でもたくさんのスタッフの方が周りにいるんですか？

たくさんいるときは本当にすごい数の人がいますよ。あ、撮ってみたいもののひとつにスタジオっていうのもあるかもしれない。私が撮られていて、その私の視線で周りを見た写真！どれだけの人に見られているのか、その感じを分かってくれる人はなかなかいないんですよ。たまにすごい顔をして見ている方もいますし、それで重苦しい雰囲気になったりして、そういうときはどれだけ緊張するのを見てもらいたい（笑）！

（笑）いつか撮る機会があったらぜひ見せてくださいね。では最後に、これからの夢、目標はありますか？

これまで消極的だったんですが、最近は新しいこと、いろいろなジャンルに興味を持つようになったんです。今は演技に1番興味があるので、機会があればもっとやっていきたいですね。面白い役が来たら、自分の中にはないような、全然イメージの違うものにもチャレンジしてみたい。今度オーストラリアの映画に出ることになって、8月から撮影に行くんですよ。制作も公開も向こうで、1人日本人の男の子が出るんですが、その他監督もスタッフも向こうの方で、もちろん台詞も全部英語。役柄も今までにはなかったようなおてんばな役なので、また新しい経験ができそうでとても楽しみです。写真もずっと撮ってみたいです。それから現像も。OBの方も暗室を使いに来たりしているみたいなので、私も卒業しても利用させてもらおうと思います（笑）。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.